

金島書

時鳥

只ことば
へさて、西の方を見れば、入海の浪、白砂雪覆ひ
て、皆白妙に見えたる中に、松林一簇見えて、ま
ことに春六月の景色なるべし。この内に、小堂ま
します。八幡宮勸請の靈祠也。されば、所をも
八幡と申。敬神の為参詣せしに、爰に不思議なる
事有り。都にては、待ち聞きし時鳥、この国にて
は、山路は申に及ばず。仮初めの宿の梢、幹の松

が枝までも、耳喧しき程なるが、この社にては、

更に鳴く事無し。これは如何にと尋ねしに、宮人

申やう、是は古、為兼の卿の御配処也。或る時、

時鳥の鳴くを聞き給て、鳴けば聞く、聞けば都の、

恋しきに、此の里過ぎよ、山時鳥、と詠ませ給

しより、音を停めて、更に鳴く事なしと申。実に

や、花に啼く鶯、水に棲む蛙迄、歌を詠む事実

なれば、時鳥も、同じ鳥類にて、などか心の無か

るべきと覚えたり。

上歌う
落花浄く降りて、郭公初めて鳴き、明月秋を送り

ては、松下に雪を見ると、古き詩にも見えたれば、

折を得たりや、時の鳥、都鳥にも聞くなれば、声

も懐かし時鳥、唯鳴けや、く、老の身、我に

も故郷を泣くものを、く。

〔口訳〕

さて西の方を眺めると、入海の白波は、白砂の上に雪の如くに
砕け覆うて、一面に白妙の色に見えてゐる中に、松林が一簇見
えてゐて、まことに春二月の景色とも言へさうな景色である。

この松林の中に一字の小堂がある。八幡宮を勧請した霊社であ
る。それでその所をも八幡やはたと称して居る。敬神の為に参詣した
ところ、ここに不思議な事がある。都に於ては、鳴く音を待ち
に待つて聞きはやす時鳥が、此の佐渡の国では、山路は言ふに

及ばず、仮初の我が宿の梢、松樹の枝にまでも、耳喧しく感じ
るほどに鳴くのだが、此の社では全く鳴くことがない。これは
どうした事だらうと尋ねた処、社人が答へるには、ここは昔、
為兼卿の御配処であつた所である。或時、時鳥の鳴くのを御聞
きになつて、「鳴けば聞く聞けば都の恋しきに、此里すぎよ山
時鳥」と御詠み遊ばして以来は、鳴く音をとめて、全く鳴かな
くなつてしまつた、といふ。誠に、花に啼く鶯や水にすむ蛙ま
でも、歌をよむといふ事は真実であるのだから、時鳥も同じ鳥
類として、どうしても心のない事があらうかと感じた事であつた。

「落花きよく降りて、郭公はじめて鳴き、明月秋を送りては、松下に雪を見る」と、古い詩にも見えて居るから、この時鳥もまことに折を得て鳴くものといふべきである。都鳥に対してさへも、昔人は都の事を聞いたといふのだから、時鳥よ、そなたの声もなつかしい。たゞ鳴きに鳴くがよい。老の身の自分にも、故郷を思つて泣いて居るのだから。